

茨城県教育財団文化財調査報告第109集

国道354号国補道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

木崎城跡

平成8年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第109集

国道354号国補道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

きざきじょう
木崎城跡

平成8年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



木崎城跡全景



木崎城跡1・2区全景

序

茨城県は、県内の主要な都市間をおよそ60分で連絡する道路網の整備を目的とする「県土60分構想」の実現のため、高速道路やこれを補完する国道や主要地方道等の幹線道路網の整備を図っております。

国道354号線は、鹿行地域から県南地域、県西地域を横断して、群馬県に至る主要な幹線道路であり、地域間の連携や県土の一体的な振興を図るため、計画され整備が行われているものです。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と国道354号線改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業について委託契約を結び、平成6年4月から同年6月まで木崎城跡の調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構、遺物が検出され、北浦村の歴史を解明する上に多大の成果をあげることができました。

本書は、木崎城跡の調査成果を収録したものであります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県からいただいた多大な御協力に対し心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、北浦村教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成8年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成6年4月から6月まで実施した茨城県行方郡北浦村大字内宿字木崎940番ほかに所在する木崎城跡の発掘調査報告書である。
- 2 木崎城跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～平成7年3月
	橋 本 昌	平成7年4月～
副 理 事 長	小 林 秀 文	平成6年4月～
	中 島 弘 光	平成7年4月～
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月
常 務 理 事	一 木 邦 彦	平成7年4月～
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～平成7年3月
	齋 藤 紀 彦	平成7年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫 平成4年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫 平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月 係長)
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔 平成6年4月～
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明 平成5年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎 平成7年4月～(平成5年4月～平成7年3月 課長代理)
	課 長 代 理	大 高 春 夫 平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月 係長)
	主 任	小 池 孝 平成7年4月～
	主 事	軍 司 浩 作 平成5年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重 平成5年4月～
	調 査 第 二 班 長	小 泉 光 正 平成6年4月～平成6年6月
	主 任 調 査 員	中 山 忠 久 平成6年4月～平成6年6月 調査
	主 任 調 査 員	荒 井 保 雄 平成6年4月～平成6年6月 調査
整 理 課	課 長	山 本 静 男 平成7年4月～
	主 任 調 査 員	荒 井 保 雄 平成7年10月～平成8年3月 整理・執筆・編集

- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、木崎城跡の縄張り及馬出部の構造については、千葉県文化財センター主任技師の柴田龍可氏、陶磁器の年代と生産地については、出光美術館学芸員の荒川正明氏に御指導をいただいた。
- 5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

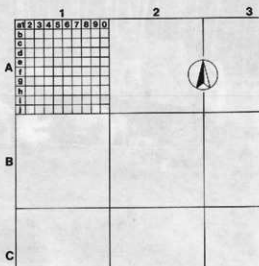
ふりがな	こくどう354号に国補道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
書名	国道354号国補道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	木崎城跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第109集						
著者名	荒井 保雄						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029--225--6587						
発行日	1996(平成8)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きざきじょうと 木崎城跡	みづきまきめがたけんとしむら 茨城県行方郡北浦村 おほぞうちむらきざき 大字内宿字木崎940 弘 番ほか	08424-19	36度 5分40秒	140度 30分40秒	19940401 ～ 19940630	2,540㎡	国道354号国補 道路改良工事に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
木崎城跡	城館跡	中世 近世	堀 5条 土塁 1条 溝 4条 土坑 5基 炭焼窯跡 1基 不明遺構 4基		土師質土器 内耳土器 陶磁器・五輪塔 硯・古銭・鈔 縄文土器片 須恵器・土師器 土玉		城郭の馬出部を確認した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸=+10,480m、Y軸=+60,880mの交点を基準点(A1a₁)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a₁区」、「B2b₂区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

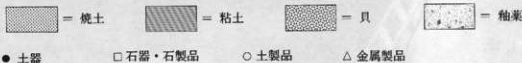
- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 堀・溝—SD 土塁—SA 土坑—SK 炭焼窯—SY 不明遺構—SX

遺物 土器・陶磁器—P 土製品—DP 石製品—Q 金属製品—古銭—M 拓本土器—TP

土層 攪乱—K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺跡の縄張り図は縮尺1000分の1、全体図は300分の1、その他の遺構実測図は60分の1に縮尺し掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に $S = 1 / \bigcirc$ と表示した。
- (3) 「主軸方向」は長径方向とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 $N-10^{\circ}-E$ 、 $N-10^{\circ}-W$ ）。なお、[]を付したものは推定である。
- (4) 土器の計測値は、A—口径 B—器高 C—底径 D—高台径 E—高台高 F—体部径とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- (5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。



X2-掘削中 Y2-掘削中 Z2-掘削 A2-掘削 Q2-掘削 掘削



作業風景

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺跡	11
第1節 遺跡概要	11
第2節 遺構と遺物	11
1 土塁	11
2 堀	12
3 溝	17
4 土坑	23
5 炭焼窯跡	24
6 不明遺構	25
第4節 まとめ	29

挿 図 目 次

第1図 調査区呼称方法概念図	第10図 第3号堀、第2号溝、第6トレンチ 土層断面図
第2図 周辺遺跡分布図	5
第3図 遺跡調査区割図	6
第4図 馬出部測量図(調査前)	7・8
第5図 木崎城跡I区全測図	9
第6図 木崎城跡II区全測図・第1号堀土層 断面図	10
第7図 第1・2・3トレンチ土層断面図	14
第8図 第4・7トレンチ土層断面図	15
第9図 第3・4号堀土層断面図	16
第11図 第1・3号溝実測図	17
第12図 第1・2号堀出土遺物実測・拓影図	21
第13図 第2号溝、第4号堀出土遺物実測・ 第3号堀拓影図	22
第14図 第5号土坑・出土遺物実測図	23
第15図 第1号炭焼窯跡・出土遺物実測図	24
第16図 第1・2・3・4号不明遺構実測図	26
第17図 遺構外出土遺物実測図・拓影図(1)	27
第18図 遺構外出土遺物実測図・拓影図(2)	28

表 目 次

表1 木崎城跡周辺遺跡地図一覧表	4	表2 土坑一覧表	23
------------------	---	----------	----

写真図版目次

PL1 調査I区全景(馬出部)、調査II区全景 (第1号堀)	PL8 第4号堀、第5号堀、第5号堀土層断面
PL2 木崎城跡遠景東側、調査前全景、試掘状況	PL9 第2号溝、第2号溝土層断面、第3号溝・ 第5号土坑
PL3 第1トレンチ土層断面(第1号土壘)、 第2トレンチ土層断面(第1号土壘)、 第3トレンチ土層断面(第1号土壘)	PL10 第4号溝土層断面、第1号炭焼窯跡、 第1～4号不明遺構
PL4 第3トレンチ土層断面(第1号土壘から第 2号堀)、第1号堀I区土層断面	PL11 第1・2・4号堀、第2号溝出土遺物
PL5 第1号堀2区土層断面、第1号堀I区遺物 出土状況、第1号堀2区貝殻出土状況	PL12 第1号炭焼窯跡・第1号堀・遺構外出土遺 物
PL6 第2号堀、第2号堀土層断面、第2号堀遺 物出土状況	PL13 出土土器
PL7 第3号堀土層断面(H-H'), 第3号堀土 層断面(F-F'), 第3・4号堀土層断面 (F-F')	PL14 出土遺物
	PL15 出土遺物
	PL16 第1号炭焼窯跡・第2号堀・遺構外出土遺物
	PL17 出土石製品・古銭・鉄製品・馬歯

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

平成5年4月1日より県道土浦大洋線が国道354号線に昇格したことによって、北浦村に国道が通ることになった。今回国道に昇格した354号線は、群馬県高崎市を起点として、県境の古河市から岩井市、水海道市、土浦市を經由して大洋村の国道51号線に接続する全長約176kmの国道で、北浦村にとっても他地域とを連携する主要な東西幹線道路である。

国道昇格により現在使用されている鹿行大橋及び道路が狭隘なため、玉造町泉から北浦村小貫の大和名までのバイパス工事や北浦村次木から内容を経て山田馬渡までのバイパスなどを整備し、交通隘路を解消する工事計画が進められている。

工事に先立ち、平成5年11月5日に茨城県（鉦田土木事務所）は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。茨城県教育委員会は、平成5年11月16日に現地踏査を実施し、工事予定地内における遺跡の存在を確認した。平成5年12月24日に現地踏査の結果に基づき、茨城県（鉦田土木事務所）あてに、開発予定区域内における埋蔵文化財の範囲とその取り扱いについて回答した。平成5年2月7日に茨城県教育委員会と茨城県（土木部）は、一般国道354号線（北浦村内容宿内）の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、平成5年2月9日に茨城県教育委員会は茨城県（土木部）あてに、木崎城跡（2,540㎡）を記録保存とする旨回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団が紹介された。

茨城県教育財団は、茨城県（土木部）と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、平成6年4月1日から木崎城跡の調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

木崎城跡の発掘調査を平成6年4月1日から6月30日までの3か月にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を記述する。

- 4月上旬 発掘調査を開始するため、現場事務所や倉庫の設置、調査器材の搬入等の諸準備を行った。12日から作業員を投入して、諸施設の整備、木崎城跡の清掃、焼却作業を開始した。
- 4月下旬 15日午後からトレンチを設定し試掘を開始し、22日からは地形測量を開始した。
- 5月上旬 地形測量と試掘調査を継続して行い、堀4条、溝1条、土塁1条を確認した。
- 5月下旬 17日に重機による表土除去を開始した。また、遺構確認作業と遺構調査を交互に実施した。土塁、堀の調査を開始した。
- 6月上旬 重機による表土除去と遺構調査を継続して行った。遺構調査では土坑、溝、炭焼窯跡、堀を調査した。
- 6月下旬 24日には概ね遺構調査を終了し、25日に木崎城跡の現地説明会を行った。28日に空撮を実施した。30日までに補足調査と事務所の撤収を完了し、現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

木崎城跡は、茨城県行方郡北浦村大字内宿940番ほかに所在している。

北浦村は、茨城県の南東部に位置し、北は鹿島郡鉾田町に、東は北浦を挟んで同郡大洋村に、南は行方郡麻生町に、西は同郡玉造町に接している。

地形的にみると、霞ヶ浦と北浦の間に行方台地が南北に長く横たわり、この台地頂部の高度は35～39mで、南の方が高くなる。台地を刻む水系は、西北西から東南東へ並走し、北浦へ流入している。これらのうち、小舟津に河口をもつ武田川とその南の山田川及び蔵川が比較的広い開析谷を発達させている。台地の開析度合は高く、樹枝状模様を示す支谷がよく発達し、台地面を幅狭くかつ入り組んだ形にしている。

地質は第四紀層からなり、砂鉄質中粒砂の藪層、シルトまじり細砂の成田層下部、砂質シルトの成田層上部、中粒～粗粒の砂と小礫まじりの竜ヶ崎砂礫層、灰白色の常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。

木崎城跡は北浦村の東部にあり、北浦に注ぐ武田川の右岸の標高12～26mの舌状に張り出した台地上に位置している。当遺跡の南側は行方台地と連なっており、南側を除く三方の沖積低地は水田として利用されている。調査前の現況は、山林と畑地である。

参考文献

- ・大森昌衛・蜂須紀夫『茨城の地質をめぐって』1987年8月
- ・茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 玉造』1984年11月
- ・茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 磯浜・鉾田』1991年3月

第2節 歴史的環境

北浦村には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。当村は、北浦をはじめとした水利に恵まれており、霞ヶ浦と北浦に面した行方台地は、古代から人々の生活に絶好の舞台となってきた。ここでは、北浦村の主な遺跡について時代を追って述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、今まで確認されていない。

縄文時代の遺跡は、北浦を臨む台地上や武田川、山田川の両岸の台地上に多くみられる。縄文中期の遺跡としては三和貝塚<2>、成田早川貝塚<3>、今山貝塚<6>及び六台貝塚<7>等があり、縄文中期から晩期にかけての遺跡としては、鶴ヶ居貝塚<5>、並松遺跡<15>、両宿貝塚<4>、穴瀬貝塚<9>、戸呂井戸遺跡<17>及び妙義台貝塚<8>等がある。このうち、六台貝塚、今山貝塚、平遺跡は、昭和63年から平成元年にかけて調査され、縄文時代中期の集落が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、包蔵地として確認されており、それらは、武田川流域と山田川流域に分布している。武田川流域には、下山遺跡<14>、内宿遺跡<41>等があり、山田川流域には、古屋平遺跡<19>、御門山遺跡<20>及び中山遺跡<21>等がある。

古墳時代になると階級社会が形成され、巨大な権力を有する豪族は支配者として各地に墳墓を築造するよう

になり、武田川や山田川流域の台地にも古墳群が形成された。武田川流域には、大塚古墳群<13>、新堀古墳群<16>及び木工台古墳群<29>等がある。山田川流域には、ドンビン塚古墳群<35>、堂目木古墳群<36>等があり、堂目木1号墳から箱式石棺が出土している。そのほか北浦西岸の台地上には札幌古墳群<26>、成田古墳群<27>がある。古墳時代の集落跡は、昭和63年から平成元年に六台遺跡、古屋敷遺跡<45>、平遺跡、今山遺跡、古館遺跡<47>、平成2年に風早遺跡<25>及び平成7年度に炭焼遺跡等が調査され、古墳時代前期から古墳時代後期までの集落が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡としては、六台遺跡、古屋敷遺跡、平遺跡、今山遺跡、古館遺跡及び菟淵遺跡<49>等があり、竪穴住居跡がみついている。

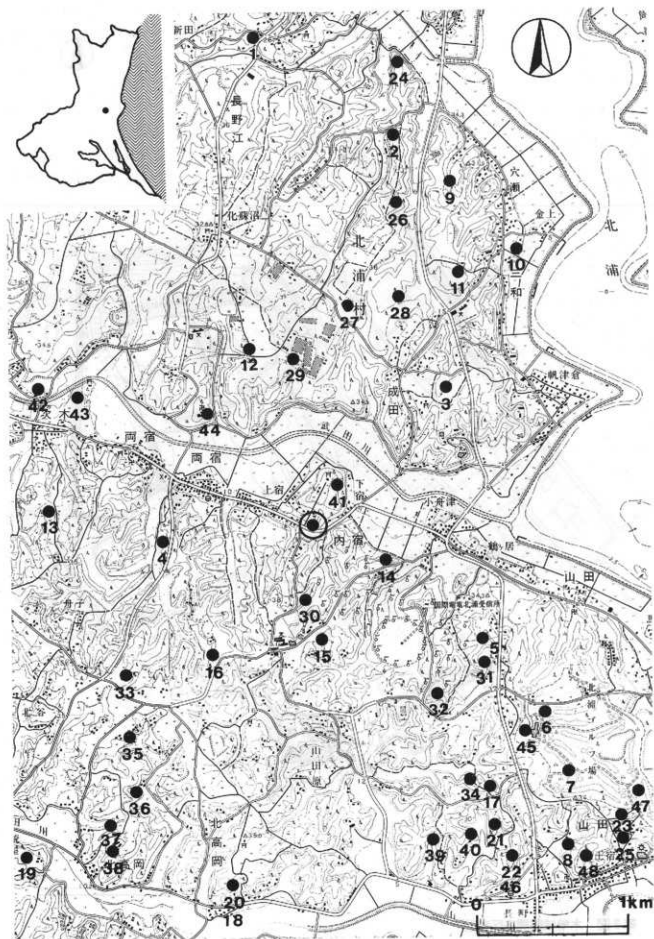
鎌倉・室町時代になると城館跡が主となり、武田川流域には、今回調査した木崎城跡のほか、武田氏が築いた神明城跡<43>、小貫館跡、西館跡<42>及び内宿館跡<44>等がある。山田川流域左岸台地上には、山田氏が築いた山田城跡<48>、前庭跡<46>、古屋敷跡、古館遺跡及び平遺跡がある。また、同流域右岸台地上には、小幡氏の築いた小幡城跡の他に、古屋台館跡、前原館跡等がある。このうち、昭和62年に神明城跡、昭和63年から平成元年にかけて古館遺跡、古屋敷遺跡及び平遺跡が調査された。神明城跡は、二の郭、三の郭、及び三の堀の一部が調査され、堀、土塁が確認されている。古屋敷遺跡では、掘立柱建物跡、土塁、堀、溝、虎口及び製鉄跡等が確認されており、16世紀後半に城郭としての縄張りや完成させたものと考えられている。古館跡では、掘立柱建物跡、土塁及び虎口等がみつかり、時期は3期に区分され、I期は山田氏が築城した時期、II、III期は16世紀の戦国期と考えられている。また、平遺跡では、掘立柱建物跡、冊列跡、堀、虎口及び井戸等がみついている。

参考文献

- ・山田地区遺跡発掘調査会「古屋敷遺跡発掘調査報告書」1990年3月
- ・山田地区遺跡発掘調査会「古館遺跡発掘調査報告書」1990年3月
- ・山田地区遺跡発掘調査会「平遺跡発掘調査報告書」1990年3月
- ・山田地区遺跡発掘調査会「今山遺跡発掘調査報告書」1990年3月
- ・山田地区遺跡発掘調査会「六台遺跡発掘調査報告書」1990年3月
- ・山田地区遺跡発掘調査会「風早遺跡発掘調査報告書」1990年9月
- ・茨城県教育財団「主要地方道土浦・大井線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 神明城跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告第48集』1988年9月
- ・菟淵遺跡調査会「菟淵遺跡調査報告書」1991年11月
- ・北浦村教育委員会「北浦史資料考」1985年2月
- ・茨城県「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」1979年3月
- ・茨城県「茨城県史料 考古資料編 弥生時代」1991年3月
- ・茨城県「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」1991年3月
- ・茨城県「茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代」1995年3月

表1 木崎城跡周辺遺跡地図一覧表

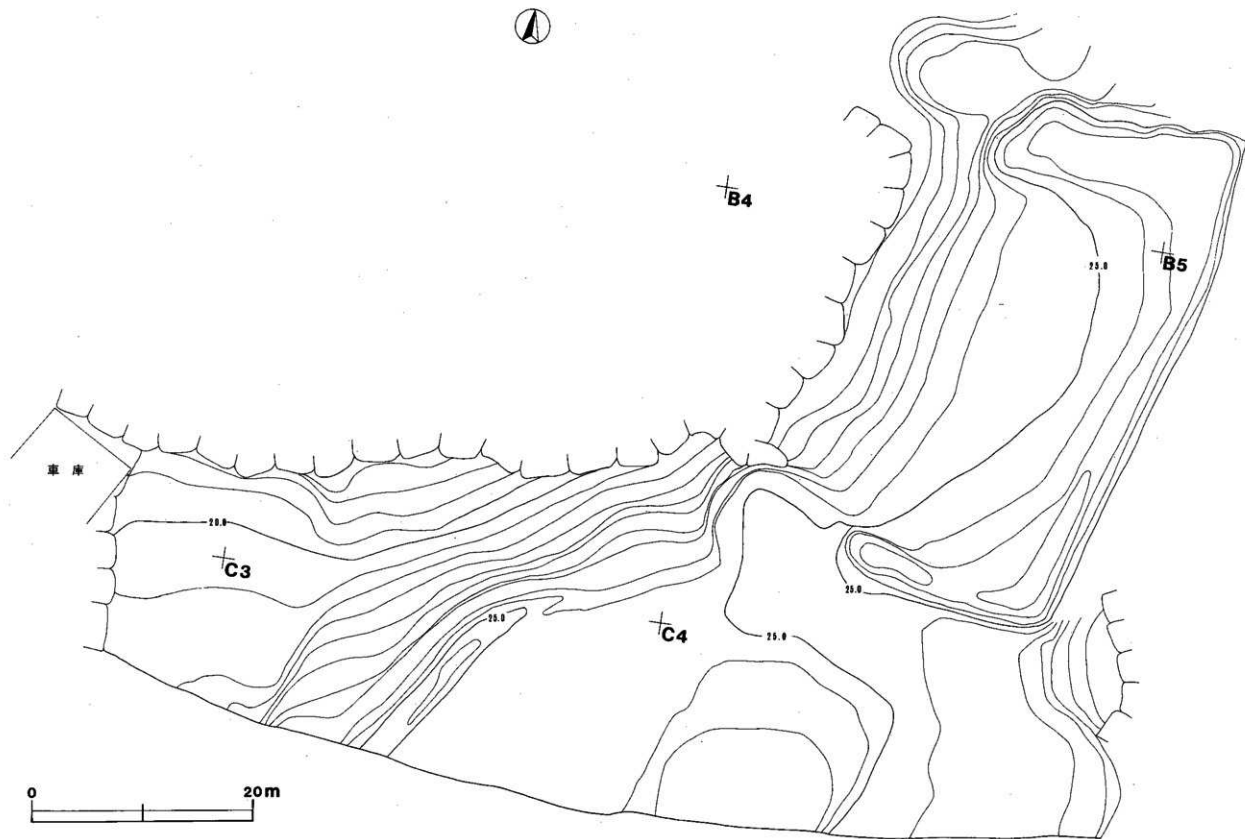
番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代					番号	遺跡名	県遺跡 番号	時代				
			旧	縄	弥	古	奈 平				中 近	旧	縄	弥	古
1	長野江貝塚	1492	○					26	札場古墳群	1478				○	
2	三和貝塚	1490	○					27	成田古墳群	1479				○	
3	成田早川貝塚	1463	○					28	塚原古墳群	1480				○	
4	両宿貝塚	1465	○					29	木工台古墳群	1481				○	
5	鶴ヶ居貝塚	1435	○					30	松並古墳群	1417				○	
6	今山貝塚	1437	○		○	○		31	大塚古墳群	1419				○	
7	六台貝塚	1436	○		○	○		32	千両山古墳群	1418				○	
8	妙義台貝塚	1442	○					33	殿山古墳群	1469				○	
9	穴瀬貝塚	1461	○					34	中山古墳群	1424				○	
10	金上遺跡	1459	○					35	ドンビン塚古墳群	1482				○	
11	道祖神遺跡	1462	○					36	堂目木古墳群	1483				○	
12	木工台遺跡	1464	○					37	大峰古墳群	1484				○	
13	大塚古墳群	1470	○	○	○			38	地藏後古墳群	1485				○	
14	下山遺跡	1466	○	○	○			39	堂入古墳群	5167				○	
15	並松遺跡	1434	○					40	京田古墳群	5168				○	
16	新堀古墳群	1471	○	○	○			41	内宿遺跡	1489		○	○	○	○
17	戸呂井戸遺跡	1440	○					42	西館跡	1433					○
18	御門山古墳群	1486	○		○			43	神明城跡	1429					○
19	古屋平遺跡	1453	○	○	○			44	内宿館跡	1487					○
20	御門山遺跡	1454		○				45	古屋敷跡	1428				○	○
21	中山遺跡	1441		○	○			46	前館跡	1427					○
22	前館遺跡	1467			○			47	古館遺跡	1426				○	○
23	平遺跡	1439	○		○	○	○	48	山田城跡	1425					○
24	炭焼遺跡					○	○	49	菖蒲沢遺跡			○		○	○
25	風早遺跡					○		◎	木崎城跡(当遺跡)	1430					○



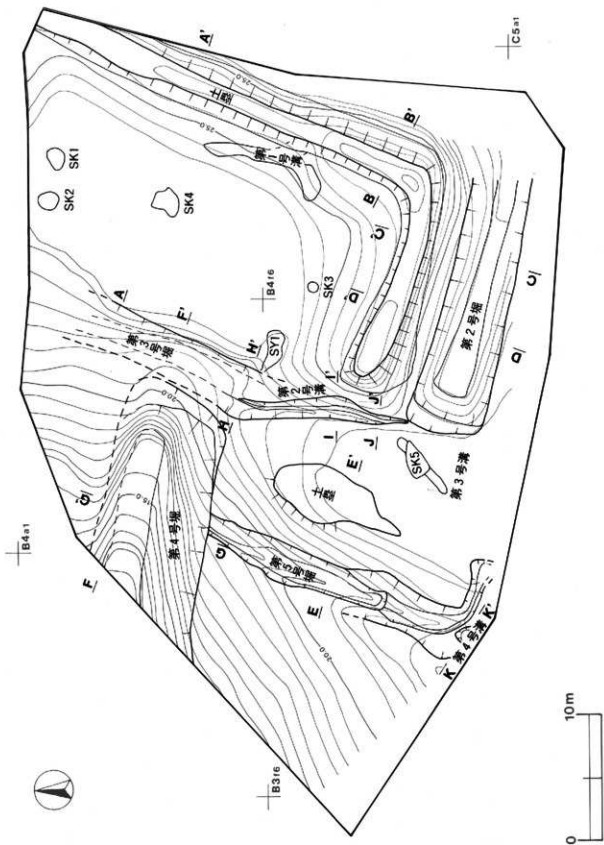
第2図 周辺遺跡分布図



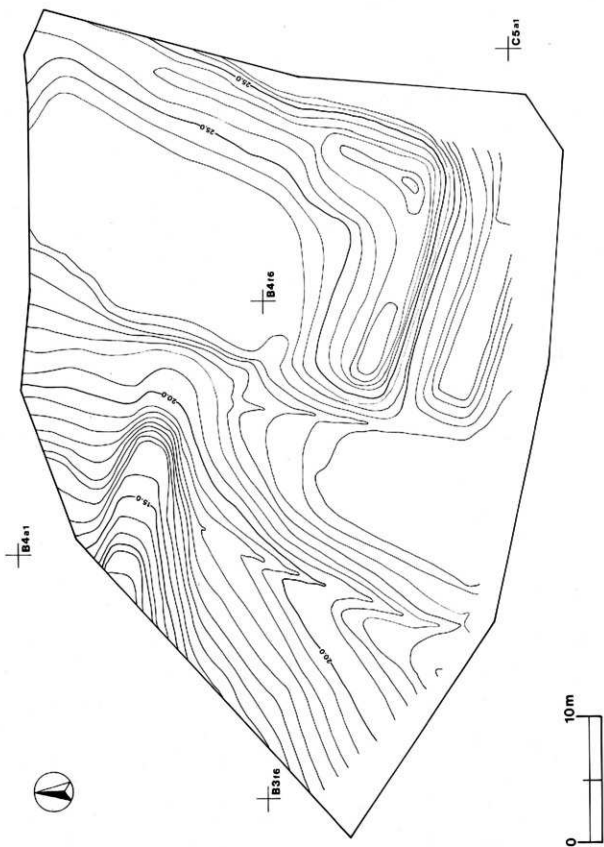
第3図 木崎城跡調査区割図



第4図 馬出部測量図(調査前)



第5図 木崎城跡I区全測図



第5図 木崎城跡I区全測図

第3章 遺 跡

第1節 遺跡の概要

木崎城跡は、北浦村の東部、武田川右岸の標高12~26mの舌状台地上に位置している。調査区は、1区と2区に分かれる。1区は最長東西約61m、南北約43m、面積約2,009㎡、2区は最長東西約59m、南北約9m、面積約531㎡で、総面積は2,540㎡である。現況は畑地と山林である。調査区の北側には、一の曲輪、二の曲輪、三の曲輪がある。

今回の調査によって、調査区の1区(東部)から土塁1条、堀4条、溝4条、土坑5基、炭焼窯跡1基及び不明遺構4基、2区(西部)から堀1条を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に10箱出土した。遺物の大部分は近世の陶磁器片で、木崎城跡に関する遺物は中世の土師質土器が僅かに出土している。その他、縄文土器片、須恵器片、土師器片、土玉、硯、砥石、五輪塔、罌、鉄滓及び古銭が出土している。

第2節 遺構と遺物

1 土塁

馬出部から、土塁が2か所確認されているが、そのうち調査区内の土塁を第1号土塁とし、構築状況を調査するために、本跡を北から南へ4区分して、土層を調べた。

第1号土塁(第5・7・8区)

位置 A4区からB4区にかけて確認した。馬出部の東部に構築され、北側には三の曲輪、南側には第2号堀、西側には第3号堀、第4号堀がある。

平面形 「コ」の字状である。

方向 北西方向に開いて構築されている。北側端部から南東方向に22m延び、そこから南西方向に約48m、さらに北西方向に約20m延びている。

規模 基底部幅3.90~9.10m、頂上部幅1.20~5.60m、頂上部標高26.00m~26.75m、土塁の頂部と第2号堀の底面との比高は2.48~2.64mである。斜度は土塁外側(城外)、土塁内側(城外)共に40~50度である。

D 第1号堀4区土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・中粒少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物・ローム中ブロック少量
- 4 明褐色 ローム粒子多量、ローム大・小ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック多量、炭化物・ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子中量
- 7 暗褐色 ローム大・中・小ブロック多量、ローム粒子中量、炭化物少量
- 8 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・粘土大・中ブロック多量
- 9 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・粘土大・中ブロック多量
- 10 黒褐色 ローム小ブロック多量、ローム大ブロック・粘土大ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量
- 11 暗褐色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子・粘土中ブロック中量、炭化物少量
- 12 暗褐色 砂粒多量、ローム大・中・小ブロック・ローム粒子・粘土大ブロック中量
- 13 暗褐色 ローム粒子・砂粒多量、ローム中・小ブロック中量、粘土中ブロック少量
- 14 暗褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 15 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック・粘土中ブロック少量
- 16 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック・粘土小ブロック少量
- 17 明褐色 ローム中ブロック・ローム粒子多量、ローム小ブロック・砂粒中量
- 18 明黄褐色 砂粒多量、ローム粒子中量

構築状況 1区は、基底部を旧地表上面に置き、炭化粒子、ロームブロック、ローム粒子及び粘土ブロックを含み、これ等を突き固めて構築し、硬く締まっている。

2区は、基底部を旧地表上面に置き、ローム小ブロックとローム粒子等を多量に含み、あまり締まりはみられないため、2号堀を掘った際の土を積み上げて構築したものと考えられる。

3区は、基底部を旧地表上面に置き、ローム中ブロック、ローム小ブロック及びローム粒子等を含み、あまり締まりはみられないため、2号堀を掘った際の土を積み上げて構築したものと考えられる。

4区は、基底部を旧地表上面に置き、ローム小ブロック、ローム粒子等を含み、あまり締まりはみられないため、2号堀を掘った際の土を積み上げて構築したものと考えられる。

2 堀

本調査区内で、5条の堀を調査した。第2号～第5号堀については、調査区内を全体的に調査したが、第1号堀は、北西から南東方向に延び、さらに堀の両端は調査区域外に延び、堀の幅も南側の農道まで広がっている。調査は北西側から南東側に順次4か所(1～4区)のトレンチを設定し掘り込み、堀の形状と方向についてのみ調査をした。

第1号堀(第6図)

位置 本跡は調査2区のほぼ全域A1区、A2区に確認され、本跡の延長線上には第4号堀が、南東には馬出部がある。

方向 4本のトレンチによってほぼ北西方向から南東方向に直線的に(47.5m)延びるところまで確認した。さらに、本跡の両端は調査区域外の北西方向と南西方向に延びるものと思われる。

規模と形状 トレンチ調査による規模は、上幅[8.80m]、下幅[1.20m]、表土からの深さ3.10～4.55mである。断面形は箱築である。

壁面 北側は40～56度の角度で立ち上がり、壁は締まりのあるロームで、壁下半は粘土である。

底面 トレンチ調査によって底面の一部を調査できたのは、1、2、4区である。1区の堀底から土坑が1基検出された。土坑は調査区域外に広がるため4分の1ほど調査したが、水が湧き出たため調査を断念した。土坑の規模と平面形は径[2m]の円形と推定され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。2区と4区の底面はほぼ平坦である。

覆土 1区は8層、2区は12層、3区は14層、4区は18層からそれぞれなる。覆土中にロームブロックや粘土ブロックが含まれていることから、人為堆積と思われる。

遺物 第12図5の播鉢片と6の焙烙片は1区土層5、8から出土しており、そのうち5は、土層5の下位付近から出土した播鉢片と接合している。1の土師質土器は1区中層から、2の土師質土器片は3区上層から、4の灯明受皿と8の水鉢は2区の中層からそれぞれ出土している。2区土層11、12から蜆の貝殻と共に11の古銭と土師質土器片が出土している。4区からの遺物の出土はみられない。

所見 本跡は木崎城跡の南端に位置し、ほぼ北西方向から南東方向に沿って掘り込まれていることがトレンチ調査によって明らかになった。この堀の延びる南東には第4号堀が北西方向に延び、西には北から延びる外堀の南端部がある。これらのことから、本跡は第4号堀と西側外堀とつながり、木崎城跡の南側の外堀、または中堀になる可能性が考えられる。

なお、本跡は近世の遺物が中層から出土していること、覆土中に貝殻、古銭及び土師質土器片が投棄され

ていること、覆土中にロームブロックや粘土ブロックが混入していることなどから、近世になって人為的に埋め戻されたものと考えられる。

第2号堀（第5・7・8図）

位置 本跡はB4区に確認され、本跡の北には第1号土塁が、その西には第5号堀がある。

方向 南東方向（N-110°-E）にはほぼ直線的に（21.0m）延びているが、南東部は土取りが行われているため不明である。

規模と形状 規模は上幅4.70~6.10m、下幅1.30~2.70m、表土からの深さ1.83~2.82mで、第1号土塁との比高差は5.00~5.12mである。断面形は箱築である。

壁面 北側は40~50度、南側は45~50度の角度で立ち上がり、壁は締まりのあるロームで、壁下半は粘土と山砂である。

底面 ほぼ平坦である。

覆土 覆土は17層からなる。土層10~12、15にローム粒子、ロームブロック及び粘土ブロックが含まれ、不自然な堆積をしていることから、人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物 第12図13の小坏は覆土上層から、12の内耳土器片は覆土下層から、15の五輪塔の空・風輪は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は第1号土塁南側端部とほぼ同じところから掘り込まれた堅堀である。

第3号堀（第5・9・10図）

位置 本跡はB4区に確認され、本跡の南東には第1号土塁があり、北西には本跡と直交するように第4号堀が北西方向に延びている。

方向 南西から北東方向（N-25°-E）にはほぼ直線的に（13.0m）延びているが、堀は徐々に浅くなり消えてしまう。

規模と形状 規模は上幅（3.50~4.10m）、下幅（1.40~2.0m）、確認面からの深さ0.6~0.7mで、馬出部平坦部との比高は1.6~2.0mである。断面形は「U」状である。

壁面 東側60~62度の角度で立ち上がっている。西側の壁は斜面部のためにほとんど遺存していなかった。東壁はロームからなり、壁下半は砂層である。

底面 ほぼ平坦である。底面はローム粒子、ロームブロック、粘土ブロック及び小礫等によって0.7~0.8m埋め戻されて構築されている。

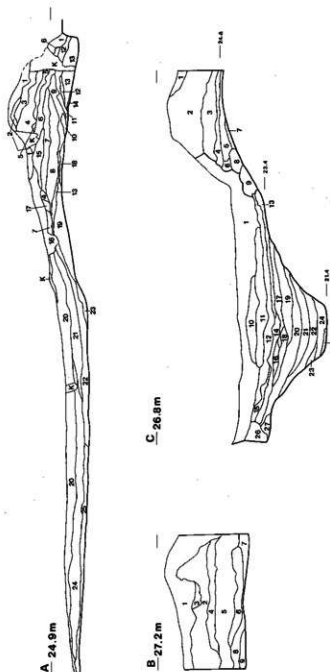
覆土 土層1~4は自然堆積である。土層5~11はローム粒子、ロームブロック、粘土ブロック及び小礫等を含み、不自然な堆積をしているため、人為的に埋め戻したものと思われる。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、「コ」の字状に開く第1号土塁の北側端部と南側端部を結ぶ線に沿って掘り込まれた横堀である。また、底面の土層から、本跡は斜面部を埋め戻した後に構築されている。

第4号堀（第5・9図）

位置 本跡はB3区、B4区に確認され、本跡の南東には第3号堀、第1号土塁、北西の延長線上には、第4号堀があり、南には第5号堀がある。



A 第1トレンチ土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・粘土中ブロック中量, 粘土小ブロック少量
- 3 明褐色 ローム粒子・粘土小ブロック多量, 炭化粒子・ローム小ブロック・粘土小ブロック少量
- 4 明褐色 ローム粒子・粘土小ブロック多量, 粘土中ブロック少量, 炭化粒子少量
- 5 黄褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・粘土小ブロック中量, 粘土中ブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子多量, 粘土小ブロック中量, 炭化粒子・粘土中ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子・粘土粒子多量, 炭化粒子中量, 粘土中ブロック少量
- 8 褐色 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 粘土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子・粘土小ブロック中量, 粘土中ブロック少量, 炭化粒子・ローム中・小ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 11 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック少量, 炭化粒子少量
- 12 褐色 ローム粒子少量
- 13 黄褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子・ローム小ブロック少量
- 14 褐色 ローム粒子多量
- 15 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子中量, 粘土中ブロック少量
- 16 黄褐色 ローム粒子多量, 粘土小ブロック中量, 炭化粒子少量, 炭化物少量
- 17 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・粘土小ブロック少量
- 18 暗褐色 ローム粒子多量, 粘土粒子・ローム小ブロック少量, 炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 19 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 20 褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子少量
- 21 黄褐色 ローム粒子・粘土小ブロック多量
- 22 褐色 粘土小ブロック多量, ローム粒子・粘土粒子中量, 粘土小ブロック多量, 粘土粒子中量, ローム粒子・粘土中ブロック少量
- 23 褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子・炭化粒子少量
- 24 褐色 ローム粒子少量, 炭化物・炭化粒子少量, 粘土粒子少量

B 第2トレンチ土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック中量
- 3 明褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 4 明褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック少量

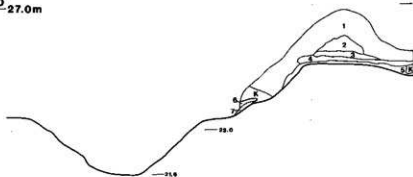
C 第3トレンチ土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化物少量
- 3 褐色 褐色土中量, ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム粒子多量
- 8 褐色 ローム粒子中量
- 9 褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 10 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 11 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 炭化物少量
- 12 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 粘土粒子・ローム中ブロック少量
- 13 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量
- 14 褐色 山砂中量, ローム粒子・粘土小ブロック少量

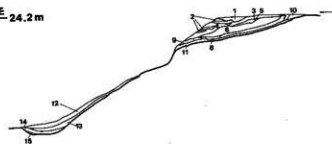
- 15 褐色 山砂中量, 炭化物・ローム粒子少量
- 16 褐色 ローム粒子中量, 山砂少量
- 17 褐色 ローム粒子中量, 山砂少量
- 18 褐色 ローム粒子中量, 山砂少量
- 19 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 20 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 山砂少量
- 21 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, 山砂少量
- 22 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, 粘土小ブロック・炭化粒子・山砂少量
- 23 褐色 ローム粒子多量, 山砂少量, ローム小ブロック少量
- 24 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, ローム中ブロック中量
- 25 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 26 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子少量
- 27 明褐色 ローム粒子多量

第7図 第1・2・3トレンチ土層断面図

D 27.0m



E 24.2m



D 第4トレンチ土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 2 明褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子・炭化粒子極微量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック極微量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量、炭化粒子極微量
- 7 褐色 ローム粒子中量

E 第7トレンチ土層解説

- 1 黒色 砂粒少量
- 2 黄褐色 砂粒多量、粘土粒子少量
- 3 黄褐色 砂粒多量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子微量
- 4 黄褐色 砂粒少量、ローム粒子微量
- 5 褐色 砂粒少量、小石中量、粘土小ブロック少量
- 6 濃い黄褐色 砂粒多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極微量
- 7 褐色 砂粒多量、ローム小ブロック中量
- 8 褐色 砂粒多量、小石微量、ローム小ブロック極微量
- 9 暗褐色 ローム粒子微量
- 10 黄褐色 ローム粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 12 褐色 粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土少量
- 13 明褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土少量
- 14 褐色 炭土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 15 明褐色 砂粒多量

第8図 第4・7トレンチ土層断面図

方向 北西方向(N-75°-W)へ直線的に(17.0m)延びるところまで確認したが、さらに、調査区域外の北西方向に延びる。

規模と形状 規模は上幅(10.0m)、下幅[4.80m]、表土からの深さ3.95mである。断面形は箱薬研である。

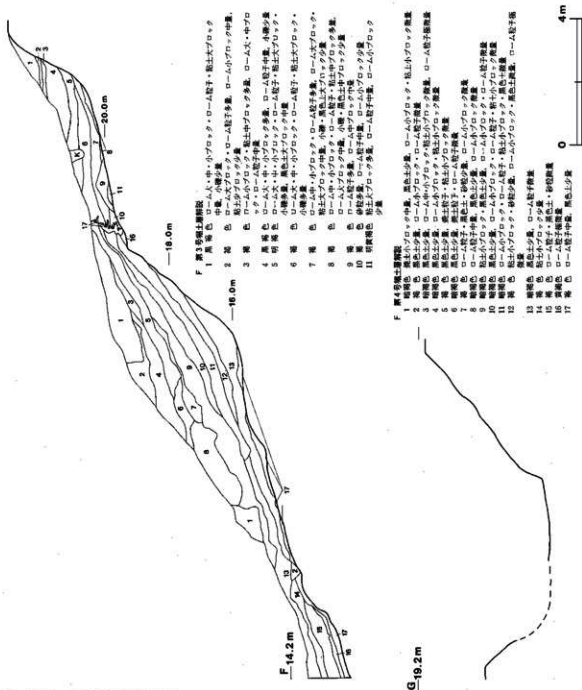
壁面 北側は50~70度、南側は50~70度の角度で立ち上がり、壁は締まりのあるロームで、壁下半は粘土と砂層である。

底面 斜面に沿って三段に掘り込まれている。一段は約50度の傾斜で上端から深さ約4.70m掘り込まれ、2.50mの平坦面がある。二段は約30度の傾斜で一段目から深さ約0.6m掘り込まれ、約4.7m緩やかに傾斜している。三段は約45度の傾斜で深さ0.8m掘り込まれ、そのあと緩やかに傾斜している。

覆土 17層からなる。土層1は土取りの際の攪乱層である。土層2~8及び13はロームブロック、粘土ブロック及び黒色土が覆土中に混じり不自然な堆積をしていることから、人為的に埋め戻したものと思われる。

遺物 第13図17の瓦質の壺が覆土中層から出土している。そのほか覆土中から17世紀後半から18世紀にかけて

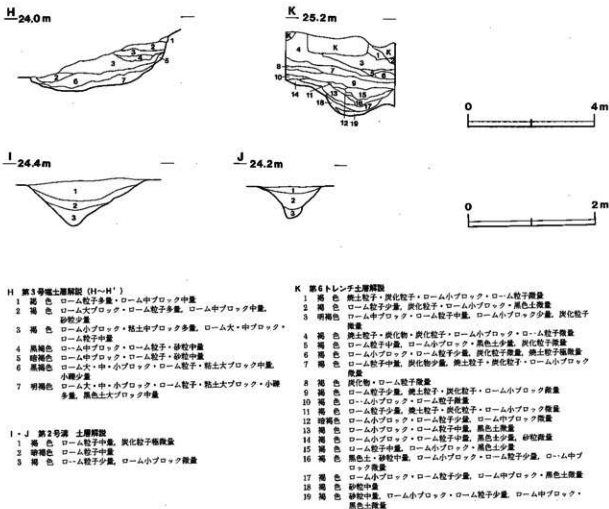
第9図 第3・4号堀土層断面図



の肥前系唐津の三島手の鉢片，瀬戸・美濃系の水鉢片が出土している。また，覆土中のゴミ穴から明治時代の瀬戸・美濃系の中碗，小碗，大皿，小皿，小瓶，急須及び蓮華がままとって出土している。

所見 本跡は馬出部のはば中央に位置し，北西方向に沿って掘り込まれていることが調査によって明らかになった。また，この堀の延びる西側には第1号堀が北西に延びていることから，本跡の北西側と第1号堀がつながる可能性が考えられる。

なお，本跡は近世の遺物が中層から出土していること，覆土中層にロームブロック，粘土ブロック及び黒色土が混入していることなどから，中層から上層にかけては近世になって人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第10図 第3号堀，第2号溝，第6トレンチ土層断面図

第5号堀 (第5・8図)

位置 本跡はB3区の斜面に確認され、本跡の北には直交するように第4号堀が北西方向に延びている。

方向 鈎の手状に南西から北西方向に約6.0m，そこから北東方向 (N-26°-E) に約21.5m延びている。

規模と形状 規模は上幅1.0~3.0m，下幅0.2~1.5m，確認面からの深さ0.34~0.48mで，馬出部平坦部との比高は約3.6mである。断面形は「U」状である。

壁面 東側は30~40度，西側は33~40度の角度で立ち上がり，壁はロームである。

底面 全体的にほぼ平坦であるが，堀の中央部で一段低くなり，北東方向に延びる。

覆土 4層からなる自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は馬出部南側斜面に掘り込まれており，遺構の配置から横堀であると考えられる。

3 溝

本調査区からは，4条の溝を検出した。そのうち第4号溝は南側調査区域外に延びているため，遺構の一部分の調査である。第4号溝の図版は，南側トレンチとして土層断面図だけを掲載する。

第1号溝 (第11図)

位置 B4e区～B4g区

重複関係 本跡上部に第1号土塁が構築されている。

規模と形状 長さ10.28mで、上幅0.98～1.20m、下幅0.61～0.88m、深さ0.32mである。断面形はU字状である。

方向 北から南西に向けて、鉤の手に延びている。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凹凸である。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

所見 本跡は、出土遺物がないが重複関係から、時期は中世以前のもと考えられる。性格は不明である。

第2号溝 (第5・10図)

位置 B4f区～B4h区

規模と形状 長さ(12.80)mで、上幅0.67～1.90m、下幅0.10～0.23m、深さ0.76mである。断面形はV字状である。

方向 北から南に向けて、ほぼ直線的に延びている。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 本跡中央部覆土上層から中層にかけて馬の歯が出土している。

所見 本跡は、第1号土塁の北側付近から徐々に消滅していく。時期は本遺構に伴う出土遺物がないことから不明である。また、性格も不明である。

第3号溝 (第11図)

位置 B4h区～B4i区

重複関係 第5号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長さ5.78mで、上幅0.63～0.80m、下幅0.50～0.65m、深さ0.13mである。断面形は「U」状である。

方向 北東から南西に向けて、ほぼ直線的に延びている。

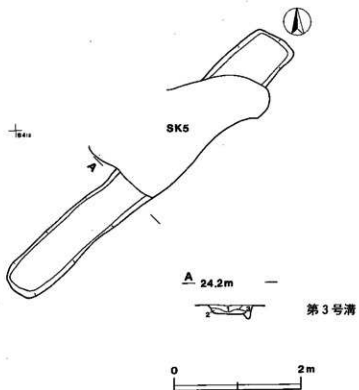
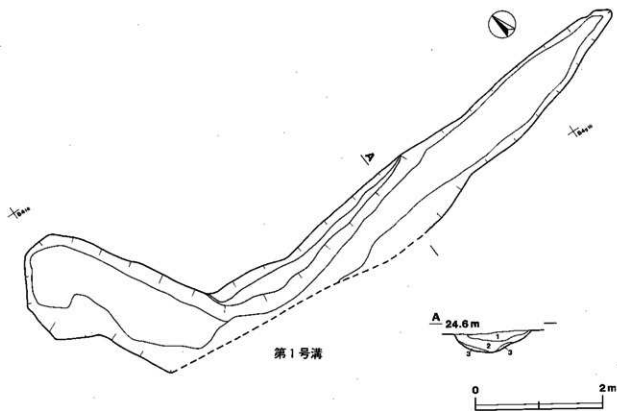
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量



第11图 第1·3号沟实测图

所見 本跡の時期は、重複関係から近世以前と考えられる。また、性格は不明である。

第4号溝 (第5・10図)

位置 B3i区

規模と形状 調査した部分の長さは0.90mで、上幅(1.00m)、下幅(0.7m)、深さ1.05mである。断面形は「U」字状である。

方向 北から南に向けて、ほぼ直線的に延びている。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

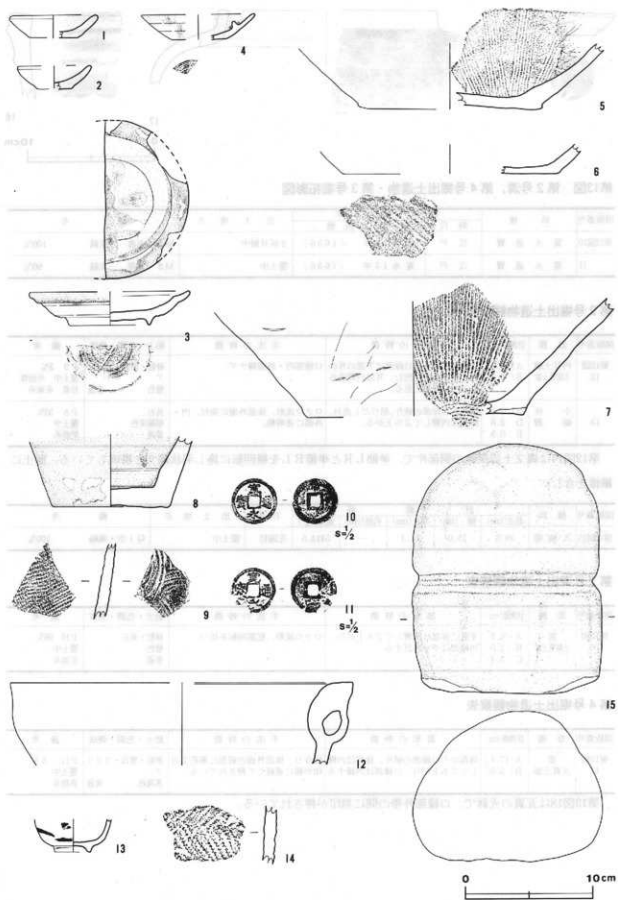
覆土 土層7から土層9は、黒色土と砂粒を含む土層もあり、自然堆積と思われるが、土層1から土層6まではローム中ブロック、ローム小ブロックを含んでいるので人為堆積と思われる。

所見 本跡が埋め戻されたのとはほぼ同時に、溝の上部にロームブロック混じりの褐色土で約80cm盛土をしてることを確認した。このことは、本跡の南側に土盤があり、これを構築するために溝を埋め戻したものと考えられる。

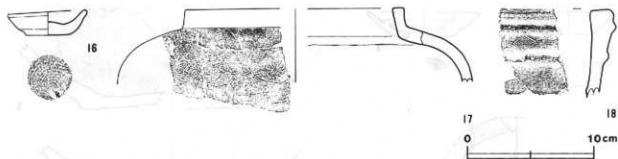
第1号掘出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	皿 土製質土器	A 6.7 B 1.9 C [4.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部口縁部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P3 50% 覆土中 在地系
2	皿 土製質土器	A [5.6] B 1.9 C [2.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部口縁部は外傾して立ち上がる。	巻き上げ。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・スコリア 褐色 普通	P4 30% 覆土中 在地系
3	丸 陶器	A (12.5) B 2.7 D [6.5] E 0.7	底部から口縁部の破片。削り出し高台体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は折縁となっている。	ロクロ成形。見込に鉄絵による草花文。折縁に銅緑釉。	長石 灰白色 良好	P17 45% 覆土中 志野織部 17世紀後半
4	灯明受皿 土製質土器	A [8.9] B 2.0 C [4.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部口縁部は外傾して立ち上がる。内面に環状の仕切がつく。	ロクロ成形。貼付。体部内面と口縁部外面に鉄釉施施。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P5 30% 覆土中 瀬戸 19世紀
5	播 鉢 土製質土器	B (5.2) C [14.5]	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横ナデ。内面の柵目は6木1単位。	砂粒・長石・雲母・ スコリア にぶい赤褐色 普通	P1 20% 覆土中 在地系
6	焙 烙 土製質土器	B (1.8) C [17.0]	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部割代成。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P2 10% 覆土中 在地系
7	播 烙 器	B (9.2) C [17.7]	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	紐作り。体部外面横ナデ。内面柵目	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P6 20% 覆土中 丹波系17世紀後半
8	水 陶器	B (5.6) C [9.2]	底部から体部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部内・外面鉄釉施施	砂粒 黄褐色 普通	P7 30% 覆土中 瀬戸・美濃系 19世紀

第12図9は須恵器製の体部片で内面に同心円文、外面に格子目文の叩きが施されている。



第12图 第1・2号出土遺物実測・拓影図



第13図 第2号溝，第4号掘出土遺物・第3号堀拓影図

図版番号	鏡種	初 鋳 年		出土地点	備 考
		時代	年号(西暦)		
第12図10	寛永通寶	江戸	寛永13年(1636)	2区具層中	M1 真書一文銭 100%
11	寛永通寶	江戸	寛永13年(1636)	覆土中	M2 真書一文銭 90%

第2号掘出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図12	内耳土銅土加質土器	A[27.0] B(6.5)	口縁部の破片。口縁部は下部の耳の付け根が大きく凹む。耳は内彎後外反して口唇部に至る。	口縁部内・外面模ナデ。	砂粒・長石・スコリア 変色 普通	P9 5% 覆土中 外圍煤 付着 在地系
13	小磁器	B(2.5) D 2.8 E 0.5	底部から体部の破片。削りだし高台。体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ成形。体部外面に染付。内・外面に透明釉。	長石 明緑灰色 普通	P8 50% 覆土中 肥前系

第12図14は縄文土器深鉢の胴部片で，単節LRと単節RLを横回転に施し羽状縄文を構成している。胎土に繊維を含む。

図版番号	種別	計 測 値					石質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第12図15	五輪塔	19.8	15.0	11.4	—	5414.5	花崗岩	覆土中	Q1空・風輪 100%

第2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図16	皿 土加質土器	A 6.2 B 2.0 C 3.4	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部はやや外反する。	ロクロ成形。底部回転系切り。	砂粒・長石 変色 普通	P10 98% 覆土中 在地系

第4号掘出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図17	壺 瓦質土器	A[17.1] B(5.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は内傾する	縦作り。体部外面の肩部に菊花文の印が横に連続して押されている。	砂粒・薬母・スコリア 黒褐色 普通	P11 5% 覆土中 在地系

第13図18は瓦質の火鉢で，口縁部外帯の間に刻印が押されている。

4 土坑

当遺跡からは、土坑5基を調査した。形状や規模は各々差異が認められるが、伴出遺物が少なく、時期や性格の不明なものが多い。ここでは、遺物が出土している第5号土坑を解説し、それ以外の土坑については、一覧表に記載した。

第5号土坑（第14図）

位置 B4i区

重複関係 第3号溝を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸2.40m、短軸1.06m、深さ0.29mの不定形である。

長軸方向 N-47°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

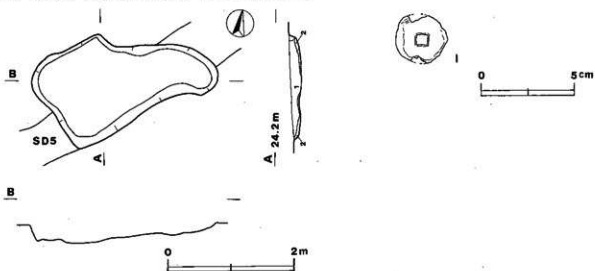
覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物極微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

遺物 東側壁際の覆土中層から古銭（第14図1）が出土している。古銭は鋳銭で、かなり腐食しており判読できなかった。

所見 時期は、遺構の形態や遺物から近世と考えられる。



第14図 第5号土坑・出土遺物実測図

表2 土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	B4a	N-82°-E	橢円形	2.06 × 1.27	43	外傾	平坦	自然		
2	B4a	N-0°	橢円形	1.55 × 1.25	60	外傾	凹凸	自然		
3	B4g	N-52°-E	橢円形	0.89 × 0.77	31	外傾	凹凸	自然		
4	B4d	N-79°-E	不整形	2.16 × 2.05	55	傾斜	平坦	自然		
5	B4i	N-47°-E	不定形	2.40 × 1.06	29	傾斜	平坦	自然	古銭1枚	SD-3と重複

5 炭焼窯跡

当遺跡の台地斜面部に炭焼窯跡1基を調査したが、遺構の約3分の1が攪乱を受けており、残存状況が良くなかった。

第1号炭焼窯跡（第15図）

位置 B4f区

規模と平面形 全長(2.35)m, 短径(1.30)mの楕円形である。

長径方向 N-55°-W

壁 最大壁高は37cmで、垂直に立ち上がっている。約13cmの厚さに粘土を張って構築している。壁面は熱を受けて赤変硬化している。

炭化室 平面形は長径(1.90)m, 短径(1.30)mの楕円形で、天井部は崩落している。窯底は粘土を張ってあり、粘土は熱を受け赤変硬化している。

煙道部 攪乱を受けているため、確認できなかった。

前庭部 斜面部のため、確認できなかった。

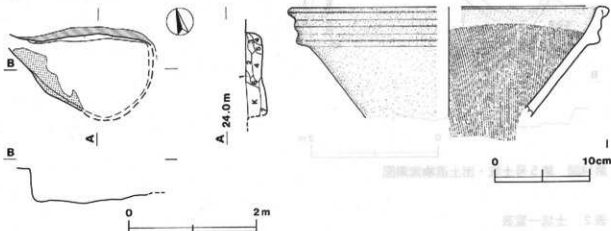
覆土 7層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|----------|--|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化物・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化物中量, 焼土大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化物中量, 焼土大ブロック・焼土中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 にぶい赤褐色 | 砂質粘土粒子多量, 炭化粒子・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 6 極暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 炭化物中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土小ブロック微量 |
| 7 黄褐色 | 砂質粘土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子中量, 炭化物微量 |

遺物 出入口部付近から瓦, 礫, 播鉢片（第15図1）が出土している。瓦は、焼土ブロックの中から出土していることから、天井部の補強材と考えられる。

所見 時期は、遺構の形態や遺物から明治以降と考えられる。



第15図 第1号炭焼窯跡・出土遺物実測図

第1号炭焼窯跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	播鉢 陶	A(34.0) B(11.6)	体部から口縁部の破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁外帯が三段巡る。	ロクロ成形。体部内面に罫目を施し口縁部内・外面から体部にかけて鉄襷。	灰石にぶい赤褐色良好	P12 40% 曹土中 明治～

6 不明遺構

本調査区の第1号土塁1区の旧表土層下部で不明遺構5基を調査した。

第1号不明遺構跡(第16図)

位置 B4d区

規模と平面形 長径0.64m, 短径0.42m, 深さ0.26mの楕円形である。

長径方向 N-59°-W

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 焼土粒子極微量

所見 本跡は, 出土遺物がなく時期の詳細は不明であるが, 土塁の表土層の下から確認されていることから中世以前と思われる。また, 壁や底面に熱を受け赤化したところはみられないが, 覆土中に焼土粒子を中量含むことから火の使用が考えられる。

第2号不明遺構跡(第16図)

位置 B4d区

規模と平面形 長径0.68m, 短径0.47m, 深さ0.14mの不整楕円形である。

長径方向 N-53°-W

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凹凸。

覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 褐色 炭化粒子微量, 焼土小ブロック極微量

所見 本跡は, 出土遺物がなく時期の詳細は不明であるが, 土塁の表土層の下から確認されていることから中世以前と思われる。また, 壁や底面に熱を受け赤化したところはみられないが, 覆土中に焼土粒子を中量含むことから火の使用が考えられる。

第3号不明遺構跡(第16図)

位置 B4d区

規模と平面形 長径0.44m, 短径(0.21)m, 深さ0.20mの楕円形と思われる。

長径方向 N-73°-W

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状。

覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子微量

所見 本跡は、出土遺物がなく時期の詳細は不明であるが、土層の表土層の下から確認されていることから
世以前と思われる。また、壁や底面に熱を受け赤化したところはみられないが、覆土中に焼土粒子を中量含
むことから火の使用が考えられる。

第4号不明遺構跡(第16図)

位置 B4d区

規模と平面形 長径1.10m, 短径0.47m, 深さ0.15mの長楕円形である。

長径方向 N-71°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

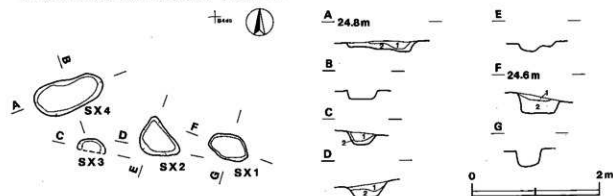
底面 平坦。

覆土 2層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 焼土粒子少量

所見 本跡は、出土遺物がなく時期の詳細は不明であるが、土層の表土層の下から確認されていることから
世以前と思われる。また、壁や底面に熱を受け赤化したところはみられないが、覆土中に焼土小ブロックや
焼土粒子を含むことから火の使用が考えられる。



第16図 第1・2・3・4号不明遺構跡実測図

遺構外出土物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	黒 土鍔質土器	A 6.6 B 1.9 C 3.8	平底。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部内面に縦方向の指ナゲ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P15 99% 表様 在地系
2	灯明皿 土鍔質土器	A 11.5 B 2.9 C 6.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転系切り。	砂粒・長石・雲母・スコリア 褐色 普通	P14 90% 表様 在地系
3	小 陶 杯	B(2.7) D 3.2 E 1.0	底部から体部の破片。底部は八角形のつくりだしの高台。体部は内傾して立ち上がる。	手捏。体部内・外面にかけて釉。高台は指でつまみ上げ、底部に「相馬」の刻印。	長石 灰白色 良好	P18 50% 表様
4	丸 陶 皿	B(3.6) D 6.2 E 0.9	底部から体部の破片。削り出し高台。体部は内傾気味に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部内・外面に反釉。内面に見込輪ハダ。	長石 灰白色 良好	P16 40% 肥前系唐津 17世紀後半
5	丸 陶 皿	A[11.5] B 2.4 D[6.0] E 0.3	底部から口縁部の破片。削り出し高台。体部、口縁部は内傾気味に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部内・外面、底部内・外面に反釉。見込目跡2。	長石 洗黄色 良好	P18 45% グリッド 17世紀前半



第17图 遺構外出土遺物実測・拓影图(1)



第18図 遺構外出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 6	丸皿 陶器	B (2.1) D 4.7 E 0.6	底部から体部の破片。削り出し高台 体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。体部内・外面に青緑 釉。見込輪ハツ。	長石 暗オリーブ色 良好	P19 25% 表採 肥前系唐津1 7世紀末
7	天目茶碗 陶器	B (2.9) D 4.9 E 0.9	底部から体部の破片。削り出し高台 体部は内彎して立ち上がる。	ロクロ成形。体部内面に鉄釉。	長石 黒色 良好	P21 50% 表採 瀬戸・美濃 系 17世紀
8	碗 磁器	A [10.0] B (4.7)	体部から口縁部の破片。体部、口縁 部は内彎して立ち上がる。	ロクロ成形。体部外面に梅花文を染 付。内・外面に透明釉。	長石 灰白色 良好	P20 50% 表採 肥前系 18世紀前半
9	焙烙 瓦質土器	A [35.2] B 7.3 C [27.2]	体部から口縁部の破片。体部、口縁 部は外傾して立ち上がる。	継作り。体部内・外面ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P22 5% 表採 在地系

第17図10, 11は縄文土器の口縁部片で, 10には無節Lの縄文が, 11には口縁直下に4本の平行沈線, 内面に1本の沈線がそれぞれ施文されている。12は土師質の香炉の体部片で, 雷門が刻印されている。13と14は土師質の在地系, 15は備前系の播鉢片で, 13は内面に13本1単位, 14は内面に7本1単位, 15は内面に6本1単位の柵目が施されている。16は瓦質の火鉢片で, 体部外帯間に刻印が押されている。

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)		
第17図17	土玉	2.5	2.9	2.9	0.5	21.0	表採 DP1 100%
18	管状鉢	3.8	3.1	3.1	0.7	38.9	表採 DP2 100%

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)			
第17図19	硯	(10.6)	(4.8)	1.2	—	(73.5)	緑泥片岩 24グリッド表土 Q2 「上高田」線刷 40%	
20	砥石	10.3	4.3	2.2	—	122.5	緑泥砂岩 トレンチ2表土 Q5 100%	
21	砥石	(9.8)	3.3	3.6	—	(106.1)	流紋岩 20グリッド表土 Q3 90%	
22	砥石	(5.9)	4.6	3.3	—	(118.5)	流紋岩 第2号掘覆土中層 Q4 50%	

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第17図23	鐔	(7.6)	(3.7)	0.8	(53.3)	鉄	トレンチ1表採 M5 30%	
第18図24	煙管	4.7	火皿径1.4	—	53.3	銅	トレンチ1表採 M6 100%	

図版番号	銭種	初鑄年		出土地点	備考
		時代	年号(西暦)		
第18図25	元豊通寶	北宋	元豊元年 (1078)	4グリッド表土	M3 行書 100%
26	寛永通寶	江戸	寛永13年 (1636)	16グリッド表土	M4 真書 一文銭 100%

第3節 まとめ

1 木崎城跡の構造

木崎城跡は行方台地の東部に位置し、舌状に張り出した台地上に構築された連郭式の平丘城である。全体の構造は、舌状台地の先端部に一の曲輪と東の曲輪、中央部に二の曲輪、基部に三の曲輪と馬出部、そして西の平地に四の曲輪を配している。

一の曲輪

城跡の北側に位置し、現況は香取神社境内となっている。最大東西幅50m、南北幅66m、標高25.4～25.8mで、ほぼ五角形である。曲輪の内側には土塁が北、東、南の三面に部分的に残存している。曲輪の外周は空堀が四方を囲んでおり、そのうち北側の空堀は東の曲輪の東端まで延び、その空堀の外側には土塁が巡っている。また、この一の曲輪の外側の土塁の北と西の二方向にはもう一つの空堀と土塁があり、二重の空堀と三条の土塁から構築されている。

東の曲輪

城跡の最北端に位置し、南北に延びる堀と土塁によって一の曲輪と区切られている。最大東西幅52m、南北幅81m、標高22.6～24.2mで、ほぼ長方形である。曲輪の内側の土塁は北と東に部分的に残存し、西側には一の曲輪を区切る空堀に沿って土塁が構築されている。曲輪の北側には一の曲輪から延びる空堀と外側の土塁があり、東側には曲輪を囲むように幅14m、標高20.3mの帯曲輪が構築されている。さらに、その帯曲輪の東側には東西80m、南北142m、標高10～15mの腰曲輪が構築され、東の曲輪の防衛としている。

二の曲輪

城跡の中央に位置し、東西最大幅220m、南北132m、標高19.2～26.1mで、凸字状である。曲輪の南側には二の曲輪と三の曲輪を分ける土塁と空堀がある。空堀の中央部には土橋が残り、三の曲輪から二の曲輪に入る唯一の虎口となっている。また、土橋東側には土塁がクランク状に屈曲する「横矢掛り」がある。空堀は全長200m、上幅24m、深さ7.5m、壁は城内側40度で立ち上がり、逆台形状の「箱堀」となっている。また、横矢掛り東側の空堀は幅が狭くなり、「毛抜堀」となっている。西側には一の曲輪から延びる二重堀の外側の堀が、段を有しながら帯曲輪につながっている。東側は東の曲輪下部の腰曲輪と三の曲輪の南西方向から北東に延びる帯曲輪によって構築されている。

三の曲輪

城跡の南に位置し、東西最大幅101m、南北52m、標高23.5～25mで、三角形である。土塁は東・西二面に築かれている。東・西の土塁の下部には帯曲輪が巡っており、そのうち北西に延びる帯曲輪は北の構堀とつながり、二の曲輪へと続いている。土橋の西側における堀は四の曲輪に延び、その両側には土塁が構築されている。

四の曲輪

城跡の西側に位置し、東西最大幅103m、南北363m、標高6.9～9.3mで、不整形である。当跡の曲輪内では最大規模の曲輪である。また、四の曲輪内の地割は、中央の道路を挟み両側に短冊型の地割りになっている。この曲輪は平地にあり、それを囲むように水壕と土塁が巡らされている。現在、この水壕は一の曲輪直下から四の曲輪の西側を巡り、二の曲輪と三の曲輪を分ける構堀の付近で切れているが、地籍図からみるとさらに南西方向に延び、そして、南西方向に延びる馬出部の堅堀と結ばれるものと思われる。

馬出部

城跡の最南端の標高23.5～26.8mに位置し、東西20m、南北40mの長方形である。馬出部は地形を削り平坦

にし、南、北、東の三方に土塁、東に横堀（第5号堀）を巡らしている。「コ」の字状の土塁に囲まれた馬出部は、起伏のある地形を整形し、斜面を埋め戻して平坦部をつくりだしている。「コ」の字状の土塁の両先端部には客土して盛り上げた部分が左右対称につくられている。また、第5号堀は斜面部を一度埋め戻した場所に横堀として掘り込んでつくられている。第5号堀の西側には第4号堀があり、馬出部までの西側斜面部を三段の階段状に掘り込んでいく。この第4号堀と第1号堀の延びる方向がほぼ同じことから結ばれ、さらに四の曲輪を囲む外壕とつながるものと考えられる。土塁の南端部に沿って第2号堀があり、この堀は整形となっており、馬出部の南側の守りと思われる。その南側には東西9m、南北（6m）、標高26mの長方形の高まりがあり、その西側には土塁が南北方向に延びる。この土塁によって区画された空間は小さな曲輪のようになっている。その曲輪の南側斜面には小規模な腰曲輪がみられる。しかし、調査の結果、この小さな曲輪は第4号溝を埋め戻してつくられていることから、改修が行われたものと考えられる。

参考文献 北浦村教育委員会「木崎城発掘調査 第1次報告書」1987年

・北浦村教育委員会「木崎城発掘調査 第1次報告書」1987年

・北浦村教育委員会「木崎城発掘調査 第2次報告書」1988年

掲載不可

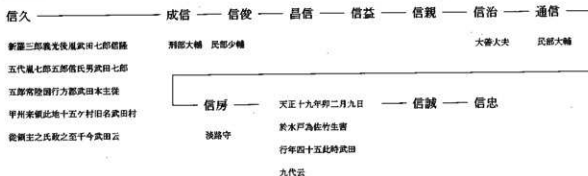
木崎城要図（西ヶ谷恭弘・汀安衛氏原図を一部修正）

2 武田氏と木崎城の歴史

木崎城跡が所在する北浦村は、大化の改新(645年)の後常陸国の行方郡に属していた。霊龟元年(715年)郡里制は郷里制に改められ、行方郡は14郷3里となり、現在の北浦村は芸律郷、高家郷、余戸里に分かれていた。10世紀になると、桓武天皇の曾孫高望王を祖とする大掾氏から分家した行方氏等の大掾一族の勢力圏となった。また、12世紀になると、「鹿島二八六頭、行方八四頭」と称され、行方氏より分家した小高、島崎、麻生、玉造氏が行方四頭として存在していた。

その後も行方、鹿島郡は「二部舊族武田相賀ヲ除クノ外、悉皆大掾ノ族、所謂常陸平氏ナリ、歴世各基地ニ據リ、支庶蕃延、自ヲ門閥ヲ以テ誇シ、下河辺、島並等諸豪ト共ニ南方三十三館ト称」と記されており、大掾一族の勢力圏となっているが、ここに大掾一族以外に木崎城の築城者といわれる武田氏の記載がみられる。武田氏の菩提寺とされる円通寺には、源信秀によると伝えられる常陸武田氏の系図が保存されており、それによると武田氏は新羅三郎義光を遠祖とする甲斐武田氏の流れをくむものとされている。

常陸武田氏系図



武田氏については、烟田氏延元元年の文書に「武井郷トアルモノ是ナリ、後武田氏久シク此地ニ住セシヨリ、遂ニ武田村トナレリ…」とあり、延元元年(1336年)には、武田氏が武田村を既に支配していたことになるが、新編常陸国誌の鎌倉大草子によると応永二十三年(1417年)信久と兄の信満は上杉禪秀(氏憲)に従い戦ったが敗れて、兄の信満は木賊山にて自殺、信久は下総の千葉兼胤を頼ったが、足利持氏の軍門に降ったため、信久は下総を離れ、常陸の国の行方郡武井郷に匿れたのが武田氏のはじまりとされているなど違いがみられるため、武田氏が武井郷にいつ頃移り住んだかは、不明な点が多く定かではない。

木崎城については、新編常陸国誌の武田に「天文二年木前啓ヲ築キ」、また新編常陸国誌の尊卑分録・武田家系・舊志に「行方郡ニアリ、武田民部大輔通信始テ築ク、通信甲斐武田義清ノ裔ナリ、其子ヲ淡路守信房ト曰フ、天正中佐竹氏ニ滅サレ、佐竹ノ出羽ニ移ルニ及デ、城廢ス」と記されているように、天文二年(1533年)に武田民部大輔通信によって築かれ、その子淡路守信房が佐竹氏によって謀殺されたことは、和光院過去帳、円通寺保存の常陸武田氏系図中に見ることができる。また、常陸三家譜、新編常陸国誌によれば中山信名は佐竹氏が秀吉の猛威を背景として南部三十三氏を太田城に招致し、一挙にこれを滅したと説いている。佐竹氏の南部討伐に関しては、「和光院過去帳」により「天正十九年卯二月九日、於佐竹太田二生害ノ衆」として、次の諸氏を掲げている。「鹿嶋殿父子カミ・嶋崎殿父子・玉造殿父子・中居殿・釜田殿兄弟・アウカ殿・小高殿父子・手賀殿父子、武田殿・已上十六人」。

こうして天正十九年(1591年)、中世以来の武田氏は佐竹義宣によって滅ぼされたのである。武田郷は佐竹

氏の領地になったが、関ヶ原没後、佐竹義宣は出羽秋田に国替えとなり、出羽から仁賀保普誠を武田郷に入部させ、陣屋を置き20年間治めさせ国替えになる。その後、皆川山城守の知行となり、武田に陣屋を置く。皆川3代75年間の支配の後、元禄十三年（1700年）、武田郷は水戸家の支藩、守山藩松平大学頭の領地となり明治維新に及んだ。

注

- (1) 今瀬文也「佐竹氏と鹿島・行方三十三館」『日本城郭大系4 茨城・栃木・群馬』新人類往来社1979年
- (2) 「常陸太田市史余録第5号」常陸太田市史編さん委員会1981年
- (3) 「新編常陸国誌」常陸書房1981年
- (4) 「水戸市史」上巻 水戸史編さん委員会1969年

参考文献

- ・ 北浦村教育委員会「北浦村資料考」1985年2月
- ・ 茨城県教育財団「主要地方道土浦大洋線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 神明城跡」
『茨城県教育財団文化財調査報告書第48集』1988年9月
- ・ 勝田市教育委員会「甲斐武田氏発祥の地 常陸武田の里」1988年
- ・ 倉川光輝「常陸武田公四百年記念村社 香取神社記」1990年1月

写 真 图 版



調査1区全景 (馬出部)



調査2区全景 (第1号堀)



木崎城跡遠景東側



調査前全景



試掘状況



第1トレンチ土層断面
(第1号土壘)



第2トレンチ土層断面
(第1号土壘)



第3トレンチ土層断面
(第1号土壘)



第3トレンチ土層断面
(第1号土塁から2号堀)



第4トレンチ土層断面
(第1号土塁)



第1号堀1区土層断面



第1号堀2区土层断面



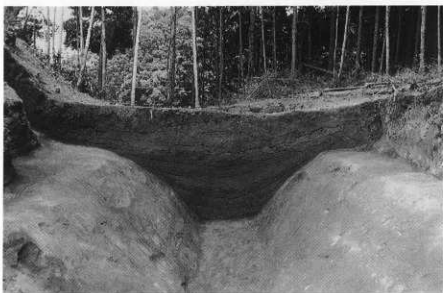
第1号堀1区
遺物出土状況



第1号堀2区
貝殻出土状況



第2号堀



第2号堀土層断面



第2号堀遺物出土状況



第3号掘土层断面
(H-H')



第3号掘土层断面
(F-F')



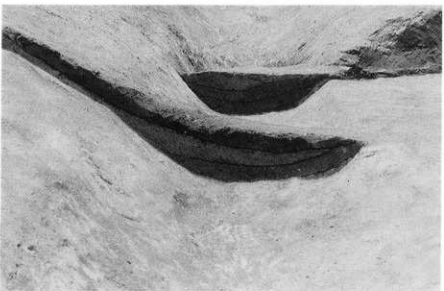
第3・4号掘土层断面
(F-F')



第4号堀



第5号堀

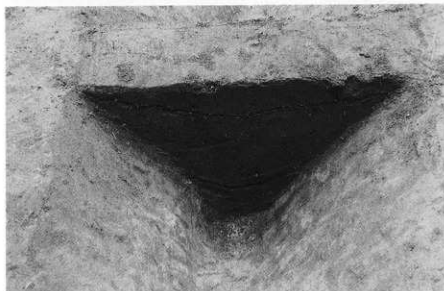


第5号堀土層断面

第2号沟



第2号沟土层断面



第3号沟·第5号土坑





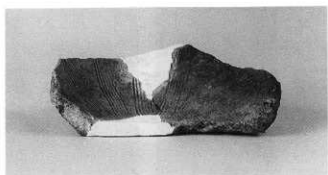
第4号溝土層断面



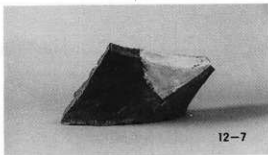
第1号炭焼窯跡



第1～4号不明遺構



12-5



12-7



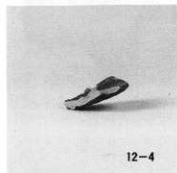
12-6



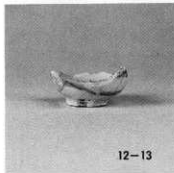
12-2



12-1



12-4



12-13



12-12



12-8



13-16



13-17

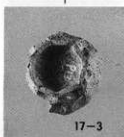
第1・2・4号堀，第2号溝出土遺物



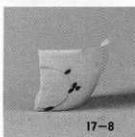
15-1



17-1



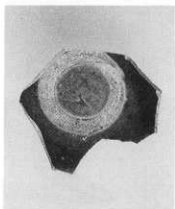
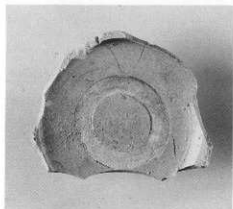
17-3



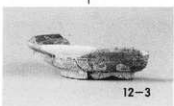
17-8



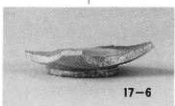
17-2



17-4



12-3



17-6



17-5

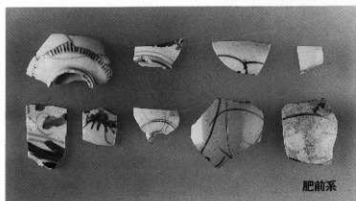
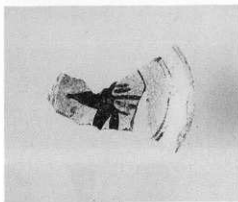
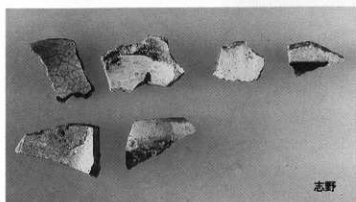
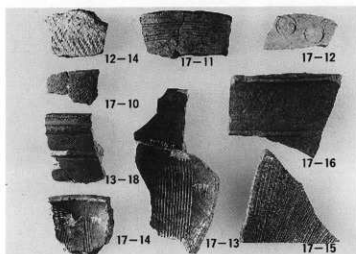
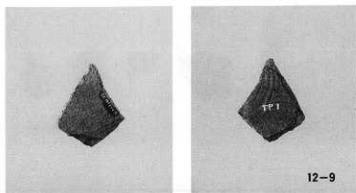


17-7

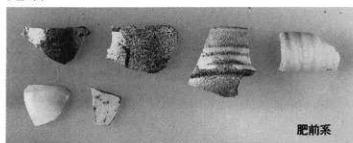


17-9

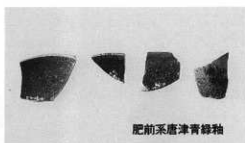
第1号炭窯跡・第1号堀・遺構外出土遺物



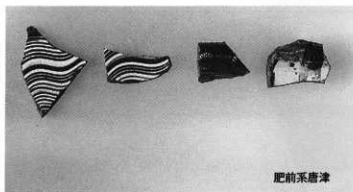
出土土器



肥前系



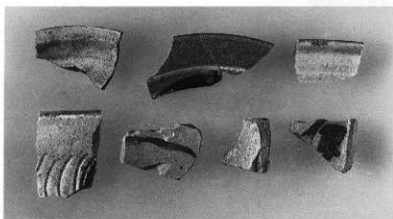
肥前系唐津青緑釉



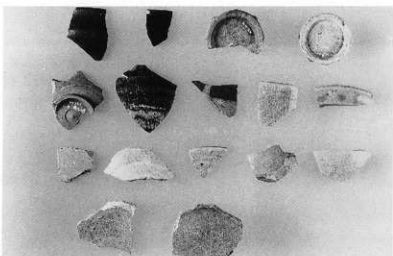
肥前系唐津



在地系

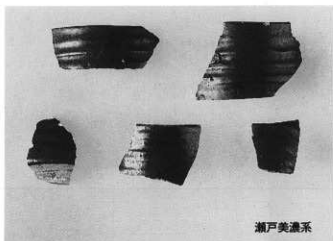


瀬戸美濃系



瀬戸美濃系

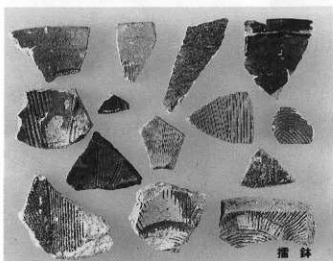
出土遺物



瀬戸美濃系



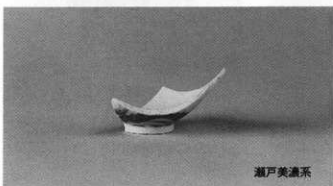
瀬戸美濃系



播鉢



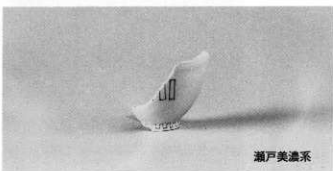
瀬戸美濃系



瀬戸美濃系



瀬戸美濃系

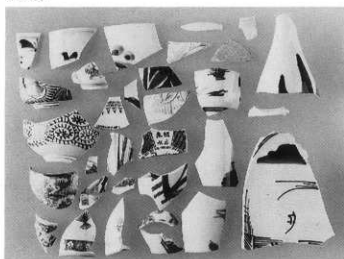


瀬戸美濃系



瀬戸美濃系

出土遺物



瀬戸美濃系



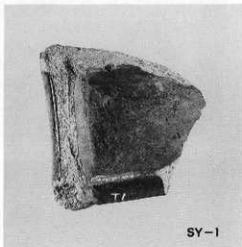
瀬戸美濃系



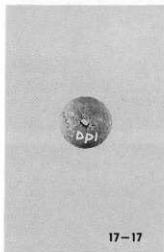
瀬戸美濃系



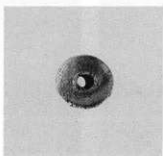
SY-1



SY-1



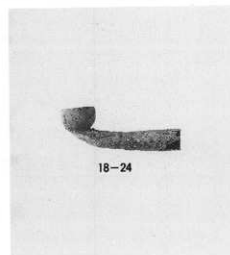
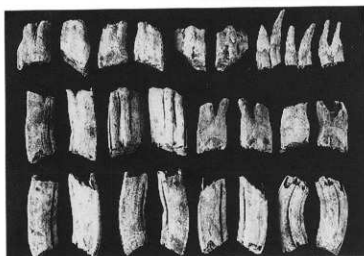
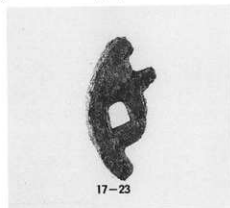
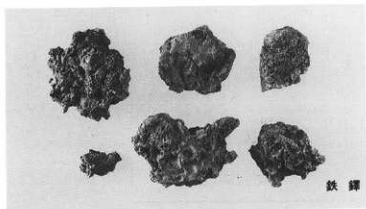
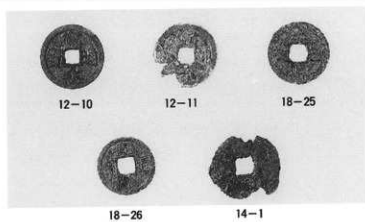
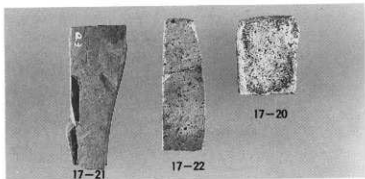
17-17



17-18



12-15



出土石製品・古銭・鉄製品・馬齒

茨城県教育財団文化財調査報告第109集

国道354号国補道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

木 崎 城 跡

平成8（1996）年3月25日 印刷
平成8（1996）年3月31日 発行

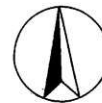
発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番地2
T E L 029-225-6587

印刷 (有) ミツギ印刷社
水戸市河和田町4433-33
T E L 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第109集

木崎城跡



木崎城要図 (西ヶ谷恭弘・汀安衛氏原図を一部修正)